

中小河川における水難事故防止策検討WG（第1回） 議 事 要 旨

日時：平成20年9月8日（月） 17:00 - 19:00

場所：国土交通省1階共用会議室

1. WGの規約、スケジュールについて

事務局より「中小河川における水難事故防止策検討WG規約（案）」及び「スケジュール（案）」を説明し、規約について了承を得た。

2. 都賀川の水難事故の状況、近年の急な増水による水難事故の比較及び洪水予測・情報提供システムの状況について

- ・今までに、都賀川の水位上昇は10分間に80cmという上昇があった。また10分間に50cmという例は、5年間で16回あった。
- ・リアルタイムレーダーをよく使うが、10分間のタイムラグがあることを初めて知った。

（事務局）システム上の問題。解析の問題等がある時間がかかる。

- ・大雨警報は都賀川の大雨を予測して出していたのか。
7月28日の都賀川周辺での大雨警報については、ポテンシャル的に強い雨が降る恐れがあるということで阪神地域に警報を発した。
- ・もう少しきめ細かな事象の予報が必要かどうか。気象庁なり、県・市で、ピンポイントで考えられるようになればいいのではないか。
- ・頭上で急速に発達する雲を押さえられないといけない。しかし、雷雲が出来つつある時は予報・予測が無理な場合もあり、現状のシステムでは技術的に100%の対応は不可能ということをも市民に周知しなければならない。
- ・リアルタイムレーダーのタイムラグを10分から5分に縮めることはできるのか？
（事務局）実降雨の把握から予測へ、と考えなければならないと思っている。
- ・Xバンドのネットワークは自治体で取り組み出している。国の方でもきめ細かな感度が良いものが必要という流れが出てきている。

3. 中小河川における水難事故防止策に関する論点について

- ・まずは、どのようなメカニズムで急な増水が起こったか、原因をしっかりと把握・理解して議論することが必要。どれだけの雨がどこで降ればどうなるのか、併行していくつか検証してみなければならない。

（事務局）雨を降らせてどういう流速が出るか等は解析できる。兵庫県とも相談させていただき、検討したい。

- ・今後の対策を考えたときに、危なそうなところにどれだけ注意喚起できるか、それぞれ

の危ない川に対し、どのような情報をどれだけ出せるかを検討しなければならないと思う。

- ・これまで啓発をいろいろと行ってきたが、共通認識を持っていない方にいかに持ってもらえるかが課題だろう。
- ・河川管理者は技術的な活動を行う（役割を担う）が、利用する側の意識をどうするかというのが一番大きな問題。「道路交通安全」のように、「河川活動安全」というのを一般化しないといけない。技術と意識は両輪。
- ・今回の都賀川の事故で、表六甲ではないところに雨が降っているとき、どういう情報を出したのか、出していかなければならないかも考えなければならない。
- ・都賀川のような事故がどこでも起こりうる中で、利用者側が必要な情報が何なのかを考えなければならない。
- ・川は個性が強いため、川毎の配慮事項が出てきて水難事故減につながればいい。
- ・まず、今の技術の中で優先度を付けるとなれば、人が集まる整備をしたというところが優先度高いのではないか。
- ・自然な河川で人の集まる箇所、親水施設整備をした箇所、子どもの水辺、それぞれで事故が起こった場合、その責任が違ってくるのではないか。
- ・雨の予測にしても、情報伝達の時間、感度の問題があるが、今の技術の中で何ができるのか。現状は、最新の技術を使っていないのではないか。実際、都市域でXバンドを使用することは可能。
- ・河川利用者がどのような情報が欲しいかということ、判断に役立つ過去の情報（10分間での急な水位上昇があった）であるとか、流域界が分かるようなレーダー表示。
- ・今回、どのような流域でどのような河川があるか、また、それに対し、どのような対策を行っているのかの整理が必要。

（事務局）現在、データがない中で手探りで整理しているというのが実情。

- ・どこかで図（レーダー雨量、気象、地形）を読むための訓練が必要。
- ・雨量の予測精度の向上、今の時点で何ができるか、川で親しんでもらう前の周知と使ってもらっている際の周知の話は内容が違う、という整理が必要。
- ・水難事故は楽しみの中で起こる。これは、他の事案とは違う。楽しいから逃げにくいということがあり、単純に処理はできない。利用者の油断がある。
遊んでいるから逃げにくいというのはその通り。自分が活動するときは、必ず現場からの孤立者を一人作り、離れた形で全体を見て、気象情報等の情報収集を行う人間をつける。一緒に活動する人間ではいけない。そのような対応の指導がRACの研修の中にしっかり盛り込まれているか。
- ・避難できたケースとできなかったケースの比較が必要。また、避難経路がどれくらいの間隔でどのようなものが必要かと考えたとき、避難する際の行動・心理を考えることが大切。また、平常時の注意喚起については、「急な増水」という言葉では伝わらない。「分でcm上昇した」という具体的な説明がされると違う。

- ・今の人たちは体験がなく、知らないまま大人になってしまう。具体的に体験する場も設けることが必要。
- ・気象庁としても何かできないかと考え、8月14日に記者発表を行った。民間気象事業者の携帯を利用したPUSH型の情報提供の例などを気象庁HPに掲載している。また、過去の災害事例の伝承も重要。
- ・由良川でバスが取り残された事故では、現場に過去の水位を示すポールが立っていたが、とてもわかりにくかった。もっとわかりやすい警告を出せば気をつけ方が違うのではないか。誰に向けた情報提供なのかの検討が必要。
- ・川の特徴は川毎に違う。川のプロへの情報提供、弱者へのシンプルな情報提供と2通りある。

(事務局) 看板をどういう内容を示しているか、何を示すべきか、ということも整理したい。

(事務局) 洪水予測のあり方、小さい河川での事故をどう防ぐかを整理して示したい。